社会学者湯村栄一が試みた「没価値性」概念の超克

日本大学　徳山弓恵

1　目的

ドイツの社会学者マックス・ヴェーバーが発した Wertfreiheit の概念は、研究者を自らの価値観から守り、より事実認識にまい進するよう促すものとして、戦前の日本では「没価値性」として受容されていた。現在のヴェーバー研究では、この Wertfreiheit の「没価値性」的解釈は、ヴェーバー自身の意に反するものとして退けられている。しかし、当時この「没価値性」がきっかけとなって戦時中の社会学界における論争の中で生まれた学的営為には、日本のヴェーバー受容史上、無視できないものがある。

太平洋戦争が激化し、学術的世界にも政治的圧力がのしかかっていた時代。「没価値性」は学者の良心――すなわち政治的「価値観」を一切排する姿勢――を政治的制約から守る最後の砦として、これまでのヴェーバー研究では一定の評価をされていた。

一方、この「没価値性」に対し、その超克を意図して、独自の解釈を対峙させた日本の社会学者に湯村栄一がいる。

第二次世界大戦が激化することによって生じた混乱の中で、日本社会を再構成する社会原理を模索する「日本主義社会学」という学派が生まれた。湯村は、この日本主義社会学を代表する一人である。大東亜共栄圏を含めた日本を統合する価値理念の構築を目指す湯村にとって、学者の価値理念を棄却するよう求める「没価値性」との対決は避けられないものであった。当学派が戦時中繁栄した理由の１つには、当時日本を席巻していた大日本帝国の政治的イデオロギーの中に包摂されてしまったためである事は否めない。湯村をはじめ日本主義社会学の代表者たちは、戦後、公職追放などで社会学の表舞台からは姿を消してしまう。したがって、湯村の「没価値性」否定は、これまで日本主義社会学の存在ごと、今日までほぼ顧みられることはなかったと言えよう。

本研究の目的は、湯村による「没価値性」超克の過程を調査することで、戦時下における「没価値性」受容状況と、これまで注目されることがなかった日本人研究者の学問的スタンスを再評価することである。

2　方法

湯村の書籍とこれまでの論文を調査した結果、湯村は時局だけを理由に無反省に没価値性を批判したのではなく、自身の時代診断と彼のこれまでのドイツ社会学研究を通して培ってきた冷静な知見をもって研究に打ち込んでいた。このような様子は、湯村の「没価値性」に対する真摯的ともいえる対決姿勢からうかがえるのである。

3　結果

調査の結果、彼の学問的業績は、戦時下という激動の中で単に戦争協力者として片づけられてしまうべきではなかろう。むしろ、戦後 69 年が経った今だからこそ、客観的に戦時中に置かれた彼の状況を振り返る事が可能であり、同時に建設的な意味で、戦時中のわが国知識人がおかれた知的状況に言及すべきだと考える。

文献

湯村栄一，1942,『民族的世界観の研究』慶応書房.